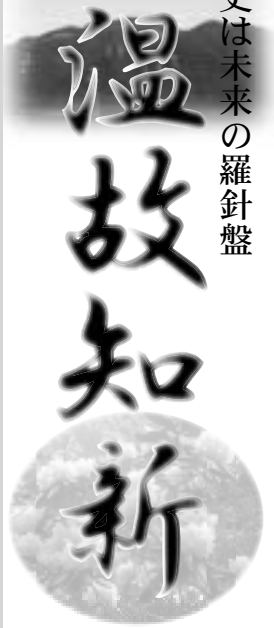


歴史は未来の羅針盤



『近江日野の歴史』第一巻「自然・古代編」、第五巻「文化財編」を刊行しました。各公民館や教育委員会において一冊四、〇〇〇円（税込み）で販売しています。平成二〇年三月末に、第六巻「民俗編」を刊行予定です。ここでは、内容の一部を紹介し、ぜひお買い求めください。

第六巻「民俗編」第二章第四節では、「豪華絢爛を誇る 日野曳山」と題して、県内屈指の春祭・日野祭で繰り出される曳山について取り上げています。

馬見岡綿向神社の春の例祭である日野祭には各町内から曳山が巡行・奉納され、道中を練り歩くその優雅でさらびやかな姿は、さらびながら絵巻物の一編を観るかのごとく人々を魅了します。そのような日野曳山の細部について詳しく解説したのが本節です。曳山の構造については第一項に、木彫刻や飾金具、幕といった華麗な装飾については第二、四項に紹介されています。

日野曳山と名工たち

曳山は、京都祇園祭など都市祭礼のシンボルであり、その起源は中世まで遡るとも言われています。日野での曳山の登場は、町に残る史料から、少なくとも十八世紀

前半と考えられます。その頃の曳山は、おそらく台車に飾り台がついたような単純な構造をしていたと思われ、現在の曳山は、様々な構造や装飾の変遷がありました。特に、文化文政期（十九世紀）に相次いだ曳山の再建・修理では、各地の彫物師や鋳師（飾金具師）によって、匠の技が冴えわたる曳山が造られました。

曳山に施された木彫刻を見ると、多くのモチーフが様々な技法で見事に表されています。一般的に作者が不明であることが多い木彫刻ですが、日野曳山には立川和四郎や長谷川與助などの名工の作と分



▲曳山（新町）

かるものが見られます。

また、飾金具についてはその作風から、十九世紀前半には伊勢屋久兵衛などの京都の職人が手がけ、十九世紀中ごろには彦七など日野の職人による製作が多くなったことが明らかになりました。これは、京都から日野への技術移転を具体的に表す重要な発見であり、きわめて良好な状態で日野曳山が受け継がれている結果でもあります。

町民文化の粋

日野曳山を一層引き立てる幕についても、文様や各町に残る文書からその変遷が辿れるとともに、日野祭と日野商人の関係を読み取れます。

例えば、龍の文様を持つ蝦夷錦といわれる織物地は、中国の明清代の官服で、はるかサハリン（樺太）を経由して日野に至りました。清水町では、地元の売薬製造業者・井田玄泉のついでで蝦夷錦

を大坂の商人から購入したことが町の文書で分かりました。それがいつ曳山の幕地になったかは、さらに検討が必要ですが、日野商人の脈を表す興味深いものといえます。

また、時代が下るにつれ豪華になる曳山に合わせ、幕も重厚な緞錦や刺繍の幕が主流となりました。それらの下絵は、岸岱・岸慶（大窪町）、小泉斐（岡本町）といった名立たる絵師たちが描いています。このような絵師に、遺憾なくその才能を発揮させた日野商人たちの豊かな感性と財力が、日野曳山ひいては日野祭を支える大きな力となりました。

日野曳山を受け継ぐ人々

遠くからみても美しい日野曳山ですが、間近でじっくり見てみると、それぞれの細部からさらに奥深い美意識がうかがえます。それは当然劣化を免れませんが、町の人々により、原形を生かす修理・修繕がされています。毎年私たちの目を楽しませてくれる日野曳山は、伝統を受け継ぐこのような人々の心意気と積み重ねる努力によって支えられています。